第3章 被害者家族の手記

息子の事故を受けて

36歳　女性

私自身、毎日のように車を運転している。

その際、気を付けていることは、「運転中には携帯電話をしない。歩行者（特に小さな子どもや高齢者）に気を配る。」など、周りの様子に注意しながら運転することである。

そんな中、今回のことが自分の目の前で起こった。

いつものように子どもが通っている幼稚園の送迎バスを待っていた。

まず、下の子が元気よく降りてきた。

次に、上の子が降りてきた。

バスを見送ったあと、ほんの数秒、下の子から目を離した時、道路向かいに止めてある私の車へ、顔だけこちらを向いて走る姿が見えた。

次の瞬間、「危ない。」という声が漏れた。

我が子が、進行中の車と衝突し倒れた。

この時感じたことは、目の前に駐車していた自家用車に向かって、周りを見ず猪突猛進して走って行った我が子の予想外の行動であった。

自分も車を運転している時、歩行者の予想外の行動（小さい子の急な飛び出し・高齢者や酔っ払いのふらつきなど）に驚いた場面がたくさんあった。

自分が横断歩道や路側帯を歩いている時や横断歩道の前で信号を待っている時は、「車は、きっと止まるだろう。」と、信じて歩いたり、おしゃべりをしている。

逆に、車を運転している時、「車に気付いた歩行者は、きっと歩いて来ないだろう。」と思っている。

今回の事で改めて、歩行者や運転手のそれぞれが、「こんなことはないだろう。」という思い込みで行動するのではなく、「もしかしたら。～かもしれない。」と様々なことを想定して、より安全を意識して行動しなければいけないことを痛感した。

特に、小さい子を連れている場合は、ほんの一瞬のことが命にかかわるので、その保護者である親が、しっかり子どもの様子を見守らなければならないことをより一層感じた。

今回、我が子がご迷惑をおかけした方の誠意ある対応にとても心打たれた。

大事に至らなかったことが幸いであったが、我が子のとった行動によって、お互いが悲しい思いを持ち続けることに繋がったかも知れない。

保護者として、もっと日頃から安全を意識して行動したり、行動させたりしなければいけないと感じた。

交通事故が１件でも少なくなるような社会になることを願っている。

また、そのような社会を作り出せるように自分自身もより考えて行動していきたい。